

幼いお孫さんがお墓づくりに参加

第 20 回で大賞を受賞した静岡県静岡市葵区の玉村 毅さんは、5歳の娘が描いた「じいちゃんとおばあちゃんの絵」を墓石に刻んだ。おじいちゃんは大好きなアイスクリームを手にとりながら、おばあちゃんもアイスクリームを食べている姿。素朴で温かみのあるその絵を平らな墓石に刻んだ。

「お墓を買ったから、墓石をデザインして欲しい。」と、父に言われたのは昨年末のことで、デザインの仕事をしている私は、何か我が家らしさのあるステキなものを作りたい！と、考えました。5歳の娘に「じいちゃんとおばあちゃんの絵を描いて」と頼んだところ、おばあちゃんが

遊びに来た私達のためにおいしい天ぷらを揚げているところ、じいちゃんは娘が大好きなハーゲンダッツのアイスクリームを買ってきてくれたところを描きました。父と母に見せたところ「今のウチの有り様がでてるね」と気に入ってくれて、この絵を彫ることに決めました。はじめは、いわゆる横型のお墓の形を基本に考えていたのですが、鏡面のように磨かれた石には、空が映るはずだということに気づき、思い切って平らな形の石に絵を彫ることにしました。完成した石には、思った通りきれいに空が映り、天上と地上を結ぶ特別なしかけのように見えます。

元気な父母が、天国に逝ってしまう日が来るなんて今は全く信じられません。いつかここに残された家族が立つ時には、空を映す石に彫られた楽しい父母の絵を眺め、家族みんなが健康で一緒にいることを楽しんでいる今の時間を振り返り、長い時間をかけて幸せな家族を作ってくれた両親に感謝するのだと思います。

第 18 回で大好きな孫の手形入りのお墓で入賞したのは静岡県富士市の緑川 ひとみさん。このお墓は、家族からのラブメッセージ。なによりも家族を愛し、家族を守りつづけてくれたのに…。あふれる想いでいっぱいでしたでしょうに…。



天国に旅立った主人のことを家族みんなで思い出しながら、設計の仕事をしてきた主人のセンスに合わせてすっきりシンプルなデザインのお墓にしました。墓石の英文メッセージは「安らかに眠りください。思い出は生き続けます。私の中に、永遠に」——このメッセージが映えることを考えたお墓です。そして、お墓の前には、大好きな、大好きな孫の手形を。家族はひとりじゃない。みんな一緒だよ！主人の思い出が、ここに来ればよみがえります。

第21回の大賞に輝いた山梨県北杜市の内藤 光代子さん（当時69歳）は、二人のお孫さんが書いた「ありがとう」と「ありがとう」の二つの「ありがとう」を刻んだお墓。上の『ありがとう』はおじいちゃんが私たちにしてくれる言葉、下の『ありがとう』は私たちからおじいちゃんへ。孫2人が書いた「ありがとう」。

お墓に彫る文字は『ありがとう』に決めていました。72歳というまだまだこれから元気で過ごしてほしい夫は、5人兄弟の長男。兄弟家族ともとても仲が良く、親戚との宴会もよくありました。その宴会の席で、必ず歌われる歌。「今日もこうして会えるのは園長先生（夫の兄、幼稚園経営）のおかげです。…今日もこうして飲めるのは、勝兄貴のおかげです。ありがとう ありがとう」感謝の気持ちを素直に「ありがとう」と口に出すことが家風でした。夫も自分の病気のことは気づいていましたが、最後はとても穏やかで、いつものとおり『ありがとう、ありがとう』とっていました。書についてははじめは石屋さんに任せようと思いましたが、「せっかくですからお孫さんに書いていただければ？」という石屋さんの勧めで、習字を習い始めたばかりの5年生と3年生の孫（姉と弟）に書いてもらうことにしました。孫たちもおじいちゃんが大好きで、晩年は二人で夫の足を一本ずつもんであげたりするなど、懸命に看病の手伝いをしてくれました。そんな二人がこんなに堂々として、まっすぐで、あたたかい字を書いてくれました。『ありがとう』一つだけのつもりだったけど、二人とも立派な書なので両方彫りました。上の『ありがとう』はおじいちゃんが私たちにしてくれる言葉、下の『ありがとう』は私たちからおじいちゃんへ。昔からそうやって声をかけあってきたから、みんなも自然にそんな意味づけを受け入れました。できあがったお墓の前に立つと自然に「ありがとう、ありがとう」と語りかけたくなります。

